大風呂敷

杉森久英

大風呂敷

杉森久英

毎日新聞社

大風呂敷

定価　六五〇円

昭和四十年十月三十日印刷
昭和四十年十一月五日発行

著　者　杉森久英
装幀者　宮永岳彦
発行者　赤木益一郎

発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町一ノ一一
大阪市北区堂島上二ノ三六
北九州市小倉区紺屋町七ノ二〇七
名古屋市中村区堀内町四ノ一

印刷　中央精版
製本　佐久間製本
〈検印省略〉

©杉森久英，1965

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

大風呂敷

目次

謀反人の子　七
こころの錦　三
金鯱の下　四九
自由は死せず　六三
官界へ　七九
若き技師　九五
得意の時代　一〇六
忠臣か姦臣か　一二九
狂人と法律　一三六
人間盗難　一六二
第二段の構え　一八六
新しい攻撃　一九三
形勢逆転　二〇八

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

再起　二三四
蛮爵　二三五
箸同盟　二五六
化物屋敷の人々　二七一
台閣に列す　二八二
華やかな浪人　二九五
内相の椅子　三〇八
金子直吉との関係　三一六
女性たち　三二八
東京の研究　三四二
隣国ロシヤ　三五五
地震のあと　三七七
残りの火　三八四

装幀・さしえ　宮永岳彦

大風呂敷

毎日新聞（朝刊）連載

（一九八四・八・二～一九八五・九・一六）

謀反人の子

後藤十右衛門の息子新平の腕白は、水沢の町で誰知らぬ者もなかった。

父親の十右衛門は小柄で、女のようにおとなしい、無口な男であったが、息子は背が高くて、西洋人のように色が白く、利かぬ気が眉のあたりにあふれている美少年であった。

新平は母親似だといわれた。母親の利恵は同藩の御医者坂野長安の娘で、実家は後藤家よりも家格が高く、豊かでもあったから、のびのびと育って、気の強いところがあった。

新平のいたずらの激しさは、父母の頭痛の種であった。

近所にみごとな柿のなる家があった。その実が赤くなるころ、一晩のうちになくなってしまった。それは新平のしわざであった。

後藤の家では、勤めのかたわら寺子屋を開いていたが、新平は教わりに来る子供たちを全部自分の手下にしてしまうと、大勢ひきつれて、ほかの町へ喧嘩を売りにいった。

新平の物おぼえのいいことも、人を驚かせた。父親の十右衛門が弟子たちに教えている間、まだ幼い新平は、庭先の梅の木に登って遊んでいたが、父の講義を一度で聞き覚えて、自分より大きな弟子が忘れているところを、大声で暗誦してみせた。

十右衛門は新平を手もとに置いてはよくないと考えて、親戚の漢学者、武下節山のところへ、本読みにかよわせた。しかし、いたずら盛りで、遊びたくてしようのない新平が、ちゃんと通うかどうか、知れたものではない。十右衛門は新平に、酒屋の通帳のような帳面を持たせて、武下へいった証拠に、いちいち判をもらわせた。新平は帳面を腰にぶら下げて、武下の講義を聞いた。

十右衛門は、シンは強かったが、見たところパッとしない、おとなしいだけの人物で、武士としてはあまり出世しなかった。

十右衛門は新平を書家にしようと思った。学問技能の世界でなら、人は身分制度のワクの外で、存分に腕を揮うこともできるし、天下に名をなすこともできる。彼は自分の不遇だった一生の補償を、新平によって得ようと思った。

しかし、新平はなかなか、書道の稽古ばかりして、おとなしくしている子供ではない。腰に帳面をぶら下げながら、いたずら三昧、喧嘩三昧の毎日を送った。しまいには師匠もたまりかねて、

「あんな者は、机文庫を背負わせて、追い返せ」

といったが、親戚一同で詫びを入れて、やっと許してもらった。

新平が藩公に召されて、奥小姓を仰せ付けられたのは、慶応三年二月で、数え年十一歳のときであった。

お小姓というものは、誰でもなれるものでなく、名誉な地位

である。しかし新平は相変らず腕白といたずらがやまず、殿様のお目玉をいただいてばかりいたので、十右衛門は心痛して、いっそお役御免を願い出ようかと、何度か思った。

しかし、翌年、明治と改元になり、お役御免を願い出るまでもなく、お城はつぶれてしまった。

十右衛門夫妻は、息子新平の荒々しい気性と非凡な才能を、たのもしく思ったけれど、国事を論ずるような人物には、決してなってほしくないと思った。というのは、彼等の身近な親戚に、国事を論じたために悲惨な最期をとげた人物がいたからである。

その人の名を、高野長英といった。

高野長英は後藤家の本家の三男で、新平にとっては大伯父に当った。彼は江戸に出て蘭学を修め、のち長崎でシーボルトの学舎に学んだ。

天保九年、イギリス船来航の風説が聞えたとき、幕府はこれを打ち払うことに決定したが、海外の事情にくわしい長英は、その不可を論じて、幕府に捕えられ、伝馬町の牢屋に入れられた。

六年の後、牢屋が火事で全焼したとき、囚人は三日以内に帰るという条件で、一旦解放されたが、長英はそのまま姿をくらました。

彼は変装して、夜半ひそかに水沢に帰ると、新平の母利恵の実家坂野家に現われた。坂野家では彼を天井裏に隠したが、やがて秘密がもれそうになったので、彼はどこへともなく旅立った。

以後七年にわたって、彼は日本各地の同情者や同志の間を転々したが、嘉永三年、江戸青山百人町に潜伏しているところを幕吏に襲われ、捕えられる前に自刃して果てた。

後藤新平が生まれたのは、高野長英が死んでから七年後であった。

新平がやっと物心ついたころのある日、近所の子供たちと表で遊んでいて、何かのことで喧嘩になったとき、相手は

「やい、謀反人の子……大きな顔をするな」といった。

新平は、何のことかわからないながら、ひどく辱しめられたような気がして、家へ馳せ帰ると、母の利恵にその理由を問うた。利恵は顔色を変えて

「まあ、そんな事を……」

といったが、しばらくして

「伯父様は立派な方です。お国のために信ずるところを述べて、罪に問われましたが、決して謀反人なんかではありません。ただ、伯父様の考え方が、世間より先に進みすぎていたので、理解してもらえなかったのです」

しかし、高野長英という存在が、後藤一家に暗い影を投げたことは事実であった。一族の中から天下の大罪人を出したということは、いつまでも彼等の記憶になまなましく残り、人々の前では真直ぐに顔をあげていられないような引け目を感じさせた。

ときどき後藤の家の台所へおずおずと現われると、世間をはばかるような低い声で、何か悲しげに話してゆく老女があった。乞食のようにみすぼらしいこの女は、息子の死のあとまで

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

生き残った長英の実母みやであった。彼女が帰ったあとで、利恵が
「気の毒な……みやさんは、明日のお米を買う金がないといって……」
「やれやれ、政事向きのことに口を出すと、親がああいうことになる。新平、お前はまちがっても国事を論ずるような者になるな。書家になれ」
十右衛門は嘆息して言った。
夫妻が息子新平の将来を案じて、高野長英のようにならなければいいがと願ったのは、彼の性質の覇気に富み、激動を好むところが長英に似ていたばかりでなく、その外貌まで似ていたからである。
高野長英は生まれつき骨組がガッシリして背が高く、顔は面長で角張り、唇も厚い方であった。
彼の特徴は、皮膚の色がぬけるように白いことで、いつも人にむかって
「吾が輩は白色人種に違いない」
といっていた。もちろん洋学を学んだ彼は、白色人種に似ていることを得意としていたのである。
彼はまた性質に傲慢なところがあって、酒を飲むと雄弁になり、よく人を罵った。彼は自分の考えが世間より進んでいるという信念を固く抱いて譲らなかったので、往々にして人の怒りを買うことがあった。
後藤新平は、母親似だといわれたが、いろんな点で、この大伯父にもよく似ていた。色白の美男子であることも、みずから信ずることの厚いところも、二人はよく似ていた。同じ血統の中の同じ遺伝因子が、母親の血によって更に濃くされて、新平の中に現われたものと見えた。
それだけに、十右衛門は心配であった。
時は幕末で、天下動乱の時である。国事に奔走して、獄に投ぜられたり、首を斬られたりする者の絶える時がない。水沢藩はわずか一万六千石の小藩で、それも伊達藩の支藩だから、何も仙台表から命令された通りに動いていればいいところで、事天下国家のことに口を出す必要もなく、口を出しても相手にされもしない。
だから、君子危きに近よらずのたとえの通り、なるべくトバッチリのかからぬように、遠くの方へのいていれば、何事もなく無事安穏の人生が送れるというものであろう。まちがっても、高野長英の二の舞いをさせてはならない。この子は幸い字がうまいから、天下一流の書家にでもして、平和で豊かな人生を送らせてやりたい……これが十右衛門の考えであった。
しかし、維新の動乱は、思いのほか早く片づいた。揺ぎかけてはいたものの、まだまだ大丈夫と思っていた幕府が、アッというまにガラガラと崩れ落ちると、いつのまにか天下は明治新政の御代となっていた。
太政官というものができて、次から次へといろんなお布令が発せられる。版籍が奉還されて、日本人はみな天皇の御親政を仰ぐ民となった。
これまでの殿様の伊達将監様が、少参事と名前が変ったけれど、これまで通りお城にお住まいになっていらっしゃる。お城

といっても、天守があるわけでもなく、城壁でかこまれたわけでもなく、わずかに濠をめぐらしただけの平城であるが。

しかし、扶持をはなれた八百余人の武士たちは、これから先、どうして暮らしてゆくか？

東京から新政府の役人が来て、北海道の開拓地へ移住を希望する者は、士族の身分を称えることを許す、引き続き祖先の地に住むことを欲する者は、平民となって帰農するとも苦しくないと告げた。

大部分の武士は帰農した。後藤十右衛門も百姓になった。

しかし、いよいよ百姓に身を落してみると、かねて覚悟はしていたものの、いろいろと口惜しいことばかりだった。

その第一は、刀がさせなくなったことである。武士の魂と教えられて、永年さしてきた刀を取り上げられると、腰のあたりが何となく物さびしく、下腹に力が入らなくて、歩くにも調子がとれないのはまだいいとして、我慢がならないのは、これまで彼等にペコペコしていた百姓や町人が、急にいばりだしたことである。

これまでは、たとえ子供でも、刀をさして田舎道を歩けば、百姓たちは馬を下り、冠り物を取って、うやうやしく道ばたへよけた。ところが武士と百姓の区別がなくなると、これまでの百姓はお辞儀をしなくなったばかりか、四民平等と称して、ことさらに無礼な仕打ちに出ることもある。

彼等は今さらのように、没落のみじめさを思い知った。子供ながら人一倍負け嫌いな新平も、くやしい思いをすることが多かった。

世の中の変動は続いた。

王政復古になり、これまでの藩主は知事と名前が変ったけれど、これまで通りお城に住んで政務をお取りになるものと思っていたのに、また新しいお布令が出て、水沢藩は胆沢県と変り、新しく権知事、大参事、少参事の役人が中央から任命された。

胆沢県庁はこれまでの水沢城に置かれることになった。

新しい支配者がやって来ると、古い支配者は場所をあけねばならない。城主伊達将監の一族は、先祖代々の城をあけ渡して、仙台へ引っ越すことになった。

新任の胆沢県権知事武田亀三郎一行が水沢へ乗り込んだのは、明治二年の夏のことであった。

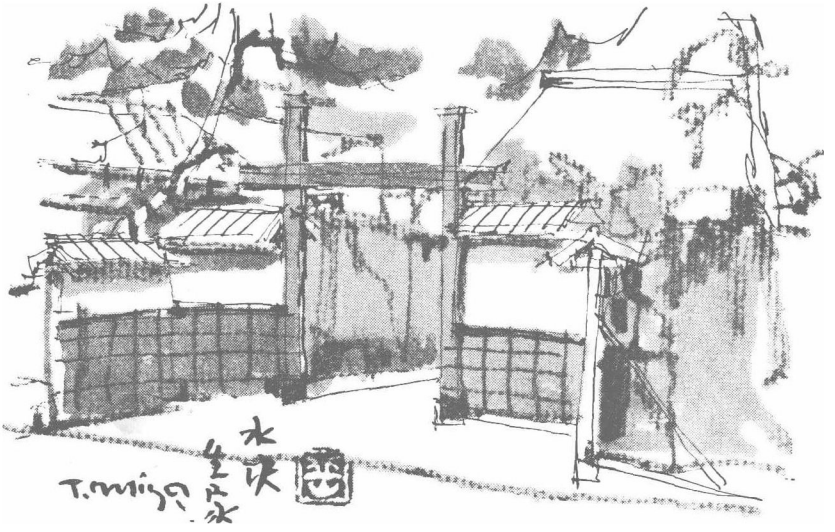
彼等は旧藩主の代りに来たものだから、すべて大名の格式である。

道中の宿場では、本陣の主人が若い者を従えて、途中まで出迎え、金棒を鳴らして先払いをした。

宿へ着くと、上段の間に案内された。

水沢城では、これまで領主の居館だった建物に武田権知事が住み、ほかの役人たちも、そのまわりに官舎を建て、一大家族のように密集して暮らした。東北の諸藩では、維新の戦争で流された血がまだ乾ききっていないで、西国の勤王諸藩出身者に憎悪を抱いていたから、市中に分散して住むことは危険だったのである。

県庁の役人はすべて、西国者ばかりだったが、地元民の東北弁が理解できないため、日常の事務に不便を感ずることが多い



ので、新しく地元の少年を四五名、給仕として採用することになった。名前は給仕だが、土地の事情にうとい役人たちのために通訳や助手の役を果したり、簡単な事務を代行したりさせるため、利口でハキハキした少年が選ばれた。

その一人が後藤新平であった。

ほかに斎藤富五郎という給仕がいた。彼はのちに総理大臣、海軍大将、子爵となった斎藤実のことで、後藤より一つ下の数え年十二歳であった。年長で、腕力も気力もすぐれている新平少年は、のちの海軍大将をいじめてばかりいた。

彼等はそれぞれ知事以下の高官の家庭に一人ずつ配属されて、取り次ぎをしたり、家庭の雑用を果したりしながら、余暇には勉学にいそしんだ。

給仕とはいっても、県庁の役人の端くれである。彼等は外出のとき刀を差すことを許された。この刀は権力の象徴であると同時に、彼等が大勢の子弟の中から選ばれた秀才であることをも物語っている。彼等は一度失った威厳を取り戻した喜びにわくわくしながら、誇らしげに刀をさして歩き廻った。

後藤新平が配属されたのは、大参事安場一平の家であった。安場一平という名前に、オヤと聞き耳を立てる人があるかも知れない。赤穂義士の物語を読んだことのある人は、その最後のくだりで安場一平にお目にかかっているはずである。

義士たちは本懐を果してのち、自首して出て、諸家へお預けになったが、そのうち大石内蔵助以下十七名は、肥後の細川藩へ預けられた。やがて彼等は切腹を仰せつけられたが、その場面は福本日南の「元禄快挙録」によると、次の通りである。

「御小姓の先導、介錯人の後従にて大石は静々として設けの席に就けば、小脇差を載せた三方は、其の前へ据ゑられた。後には藩中の物頭に其の人ありと知られた勇士、安場一平、介錯の太刀を執つて廻り立つ。内蔵助は端然として、検使の方へ一礼して、徐ろに雙の肩衣を刎ね、肌押脱いで三方引寄せ、やをら小刀を腹へ擬した其の刹那、『鋭』と一声、頭上に響けば、曠世の烈士、大石内蔵助良雄が英魂は髣髴として碧落した。」

明治の安場一平は、元禄の安場一平の子孫であった。もっとも、一平は通称で、実名は保和といった。

後藤新平が給仕として仕えることになった大参事安場保和は、快活で、物にこだわらぬ、あけっぴろげの性質の男であった。

彼はよく酒を飲み、酔うと、あたりに響く声で高笑いをした。彼は県庁で執務するときも、公用で外出するときも、洋服を着用した。まだ洋服をだんぶくろと呼んで珍しがったころで、秋田の佐竹侯がはじめて洋服を着たら

秋田の殿さん靴はいておっ返って
だんぶくろに糞つけた

という歌が、東北一円にはやったくらいだったから、安場大参事の洋服姿は水沢の町の人の注目を集めた。

安場保和は酒宴が好きで、よく部下をつれて町の料理屋へ飲みにいった。そういうとき、新平は夜ふけまで玄関の片隅に待たされた。

ある夜、酔った保和が、あとからついてくる新平にむかって

「その方は高野長英先生の血筋をひいておるそうだな」

「はい。長英は大伯父になりまする」

新平は、長英に先生という敬称をつけて呼ぶとは、珍しい人だと思った。高野長英は、この町では不吉な人物ということになっている。

保和は続けて

「その方は立派な方を祖先に持って、しあわせな子だ。わしの師匠の横井小楠先生も、かねがね高野長英先生のことを、口をきわめてほめておられた。あれほど時勢を先の先まで見通した人はいなかったといってな……」

「アノ……お殿様は横井小楠先生のお弟子でいらっしゃいまするか?」

「ウム、これでも横井門下の四天王の一人といわれたものだ。熊本へ帰れば、すこしは威張ったものよ。ハッハッハ……」

横井小楠は新政と共に朝廷に召され、参与という職についていたが、この年の一月、刺客に殺されたばかりである。まだ十三歳の新平には、思想上の深いところは理解できないが、小楠はたしか熱心な開国論者で、攘夷派に憎まれて殺されたということだった。

——それでは、安場先生も開国論者だったのか。だからして、開国論の先覚者高野長英を尊敬するというのか……。

新平は、そばへも寄れぬほど偉い人と思っていた安場大参事に、横井小楠、高野長英を通じて、微妙なつながりがあることを発見して、うれしくなった。

「お殿様も開国論者でいらっしゃいまするか」

「開国論者にも何にも、日本はもう開国してしまったのだから、いまさら開国を説く必要はないわけだよ。これからは大いに外国の文物を取り入れて、日本を立派な国にしなければならないな。その方も、高野長英の子孫なら、ひとつ大いに勉強して、お国に役立つような人物になってほしいものだ」

「はい」

「いまや四民平等の御代で、昔のような身分制度はなくなったのだから、能力さえあれば、どんな貧しい家の子でも出世できる。その方も努力したらよかろう」

「ハイ」

新平は拳を握りしめた。

安場大参事の一家は、少年の新平には、理想の家庭にみえた。

この家庭は、主人の保和をのぞくと、女ばかりで成っていた。

保和の母堂久子は六十三歳。男まさりの、しっかりした女性で、安場保和を今日の地位まで育て上げた人である。あるとき大久保利通が訪ねて来たが、主人は留守だったので、この母堂といろいろ話し込んで帰ったのち、

「あのお方は、ただならぬ女性とお見受け申した」

と言った。

岩倉具視公も、安場家をおとずれると、まずこの人に敬意を表した。

安場保和は少年のころ、横井小楠の塾へ通った。そのころ熊本では、藩校の時修館に学ぶいわゆる「学校連」と、横井の弟子のいわゆる「実学連」との間に激しい抗争が続けられていたが、学校連は数も多く、藩の主流をなしていたので、小楠派は事ごとに迫害され、通学の途中、学校連の襲撃を受けることもあった。

安場の親戚の間では、保和の身辺の危険を心配して、小楠塾へ通うことを中止させよと勧める者もあり、父源右衛門もぐらつきかけたが、反対を押し切って小楠塾に通わせたのは、母久子であった。彼女は敵の襲撃に備えて、砂で目つぶしまで作り、息子の通学に付き添って護衛した。藩校で教える昔ながらの孔孟の道よりも、殖産興業と万国通商によって富国強兵をはかるべしと説く実学のほうが、新時代にふさわしい学問だと信じたのは、彼女の見識であった。

母堂は酒が好きだったので、保和は外で飲んで帰ると、どんな夜ふけでも、彼女の部屋を訪れて、改めて一本飲みながら、その日あったことを報告しなければ寝なかった。

彼女が安場家へとつぐ前に、縁談が二つあった。一つは近在の大金持ちの庄屋の家からで、一つは貧乏な安場源右衛門からであった。彼女は、貧乏でも侍の方がいいといって、乗り込んで来たが、婚礼の晩から

「私はお酒は飲みますばい」

とことわって、大ぴらに飲んだ。

久子母堂と正反対なのは、二十六歳の露子夫人である。九つになる友子、四つになる和子と、二児の母とも思えぬほど若々しく、花のように美しい彼女は、ひたすらしとやかに、つつましく家を守って、外へ出ることを好まず、人とつきあうことを

欲しなかった。

露子も、夫が世に出るまでは、人なみに貧乏の経験をなめて来たはずなのに、ふしぎと、その容貌や態度に貧乏の汚染や垢をとどめず、生まれながらにして貴婦人であったかのように、玲瓏とした顔をしていた。

新平はこの人に、姉に対するような、ほのぼのとなつかしい感情をおぼえた。

彼はこの夫人に呼ばれて、何か用を言いつけられると、それがどんなに些細な事柄であっても、全力を傾けて仕遂げねばならぬような使命感と、生き甲斐のようなものを感ずるのである。彼はこの世に生まれ出るずっと前から、この夫人のために奉仕することを、誰かにむかって約束したことがあるような気がしてならなかった。

新平はなんとなく、いまに大きくなったら、この人のような人をめとって家庭を持つことを空想することがあった。

新平は今をときめく安場大参事の家の、花やかな、満ち足りた生活を見るにつけて、自分もいまに出世して、立派な男にならねばならぬと思った。

安場家の禄高は熊本藩では代々百五十石だったといわれている。

講談では、大石内蔵助の介錯を命ぜられた何代か前の安場一平が、切腹の前日、挨拶に出たところ、大石は彼にむかって、「つかぬことをお尋ねいたすが、貴殿の禄高はいかほどでござるか」

と聞いた。一平はこの時十石二人扶持の小身であったが、ありのままを答えると、大石がそのような微賤の者の手にかかる自分を情なく思うだろうと考えて、咄嗟に

「二百石でございます」

と答えた。ところが、当日の一平の振舞いは、いちいち作法にかなって見事であったので、破格の恩賞として、彼の言葉通り二百石に加増されることになったというのである。

しかし、以上は話をおもしろくするための作り事であって、安場一平が当時すでに百五十石の物頭だったことは、文献にも見えているし、その子孫も代々百五十石に変りはなかった。

百五十石といえば、それほどの下級武士ともいえないが、幕末のころの一平——保和は、横井小楠の高弟として、諸方の志士と往来し、家のことはまったく省みなかったから、生計は決して豊かではなかった。

それが、維新とともに一躍して、重要な地位についたのである。知事が旧制の藩主に当るとすれば、大参事は筆頭家老に相当しよう。大藩ならば数万石、中以下の藩でも数千石を下らぬ身分だから、まさに出世したといわねばなるまい。

安場保和が維新の動乱でどういう働きをしたか、くわしい事は新平も知らない。彼は横井小楠が江戸で刺客に襲われたときも、階段の蔭にかくれて助かったというから、常に師の側近にいて、手足のように働いたものであろう。

明治元年の錦旗東征では、一平は東海道鎮撫総督府参謀を仰せつけられて、先鋒を承った。

江戸城明け渡しのときは、彼も受取り側の随員の一人として、乗り込んでいる。彼が大勢にまじって、引き付け刀で通っ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com